

プロローグ

一九と葛重との出会い

江戸時代の中ごろ、江戸幕府の老中をつとめた田沼意次は商業を重視し、江戸の町はこれまでにない活気にあふれました。人びとは娯楽を求め、多くの本が出版されます。その中で、黄表紙などの娯楽本を数多く手掛けた人物が江戸で本屋を営んでいた葛屋重三郎(1750～1797年)でした。駿府出身の作家、十返舎一九(1765～1831年)は、江戸で葛屋重三郎と出会います。



十返舎一九『新撰小判蔵』
静岡市立中央図書館(木村文庫)所蔵

第1章

新たな出版文化の到来を 見抜いた 葛屋重三郎

葛屋重三郎は、それまでの常識を打ち破るような本を次々と出版しました。時代のニーズを鋭く読み解く独特の感性により、打ち出された企画を元に当時の人気作家たちと協力して手がけた本は、瞬間にベストセラーとなります。その一人が、十返舎一九でした。



葛屋重三郎



恋川春町『吉原大通会』国立国会図書館所蔵

恋川春町 戯作『吉原大通会：3巻』、[岩戸屋源八]、[天明4(1784)]、
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892509> (参照 2025-05-06)

第2章

人びとに愛された人気作家 十返舎一九

駿府で生まれた十返舎一九は、江戸で葛屋重三郎に才能を見出され、作家デビューを果たします。黄表紙や往来物など、66歳(数えでは67歳)で亡くなるまで約500種もの本を手がけました。なかでも30代から書き始めた『東海道中膝栗毛』は、大ベストセラーとなります。



十返舎一九



十返舎一九『東海道中膝栗毛』後編
個人蔵(当館寄託)

※『東海道中膝栗毛』：主人公の弥次さん喜多さんが
江戸から東海道を通って伊勢神宮に参拝し、さらに京都と大阪などを巡る旅を題材にした作品。

第3章

駿府に花開く出版文化

江戸で出版された本は、各地の本屋や貸本屋を通じて全国に広がりました。駿府では本屋の採撰亭の主人を中心に、文化人たちが集い、様々な交流が行われます。のちに駿府でも安西の左官、栄寿軒安鶴を主人公とする『安鶴在世記』が出版されました。



栄寿軒安鶴『安鶴在世記』(当館所蔵)

※『安鶴在世記』：駿府の有名な人だった安鶴の自慢話をおもしろおかしくまとめた作品。

駿府編 十返舎一九 ゆかりの地マップ



エピローグ

一九が駿府に残したもの

駿府の貸本屋の一つであった鳴雁堂の貸本目録からは、一九の作品が、駿府の人びとに読み継がれていたことがわかります。駿府の人びとにとって、一九はどんな存在だったのでしょうか。



『鳴雁堂蔵書目録』 静岡県立中央図書館所蔵

※この地図は実際の建物・通り等の所在や名称を一部省略しています。